

あなたはどちらの国に生きるのか 失われた者Ⅹ

「天国の銀行 平安と安心 ゾエーとプシュケー」ルカ12:13-25

「答え」を求める日本人

世界のエレクトリック関連の企業が集まったことがありました。その中に最先端のものを持っていない日本企業はほぼ参加していませんでした。近年日本円の価値も下がりインドネシアやアメリカに行って食事をしようとすれば昔のように同じものは手に入らない時代になっています。若者も企業に就職するために日本よりも海外を選んでいく人も多い現状があります。それほど今の日本は競争力を失ってしまったのかもしれない。

戦後日本の教育の形は詰め込み教育と言われていました。そして現在大学に通う日本の学生は答えのない学びの中で正解を聞きながらの傾向があります。しかし、以前はその地域の中の問題を見つけてそれにどう最善をもって向き合うかを探していく中で人との出会いがありつなげていった結果がベストになっていた過去があったわけです。しかし、現在の学生は問いを求めるのではなく、すぐに答えを求めてくるのです。みなさんはどうでしょうか。私たちの人生には答えではなく問いが必要なのです。このような話を聞いて自分には関係ないと思うのでしょうか。自分の子どもたちにも答えだけを教えていき、これから本来答えのない答えを求めて生きていくのでしょうか。このままでは私たちの後に生きる人たちが本当に学ぶべきことを失い、問いではなく答えだけを求めていくことになってしまうかもしれません。しかし私たちは答えがわからない中でも何かのヒント、ずれていることに気づき修正しようとする時に最善を求めることができます。そしてそのためには聖書の御言葉を読む生活は大切です。聖書を読む生活とそうでない生活には大きな違いが生まれてきます。私たちは御言葉によって生かされます。一節でも真剣に読み、考えさせられて問うなら最善を行うための知恵が与えられるのです。私たちは問題に気づいたときに考える者でありたいのです。私たちが考えること、問うことは大事です。難しい言葉も考えることが私たちの心を造り変えていきます。

～モットイナイについて～

皆さんは“もったいない”の本来の意味を知っているでしょうか。捨てたらもったいない、使わないもったいない、燃やしてしまうもったいない、皆さんの周りにどんなもったいないがあるでしょうか。ノーベル平和賞を受賞した一人の女性、日本でも大学の教授として教鞭に立ったアフリカ環境大臣の彼女が日本の“もったいない”を聞いてその後人生が変わったといっています。

“もったいない”という言葉には、“本来の姿を失っていく様を嘆く”という意味があります。神様があなたの人生に向き合っているのは“もったいない”からにはほかありません。神様が造ったあなたをこのままではもったいない、回復したいと自ら十字架に架かれたのです。私たちは本来の“もったいない”について考えたいのです。

ゾエーとプシュケー

アダムとイブは善悪の木を前に目の前の実を見て誘惑されていました。これだけはしてはならないということに目がいってしまう私たちの弱さを見ることができます。これはお金においても同じことが言えるかもしれません。多くの収穫・収入があればこれを持って遊んで楽しもうと考えてしまうのが私たち人間の弱さです。だから苦しんで糧を得なければならぬと思うようになりました。かつての神に仕える喜びも、そう考えることができなくなってしまうのです。

言語を見ていくと、神様は息を吹きかけ（ゾエー）、そして後に蛇も（プシュケー）息を吹きかけました。“プシュケー”は聖書では、たましいと訳されることもあります。私たちが物理的に生きようとする内側の知識、意思、感情であり精神的なものです。

命は神様とつながる永遠に残るものと聖書は概念化していますが、プシュケーという言葉の語源は知識、意思、感情など人間の心の中心にある“ゾエー”と断絶し失ってしまったものとしての意味もあるのです。“プシュケー”は本来の良心に基づく永遠のいのち（ゾエー）につながっているのですが、罪はその意志を緩めていくのです。繋がっているからこそ“ゾエー”は心に「それはしてはならない」と警告を与えます。ですから私たちは本来罪に鈍感になるのを防ぐことができるのです。

『群衆の中のひとりが、「先生。私と遺産を分けるように私の兄弟に話してください」と言った。すると彼に言われた。「いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停者に任命したのですか。」そして人々に言われた。「どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのち（ゾエー）は財産にあるのではないからです。」それから人々にたとえを話された。「ある金持の畑が豊作であった。そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『ど

うしよう。作物をたくわえておく場所がない。』そして言った。『こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。そして、自分のたましい（プシュケー）にこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。』ルカ12:13-21

群衆の一人はイエス様が目の前で命の話をしているにも関わらず自らの兄弟間の金銭争いについて話し始めました。仕事や学校は私たちの生活においては欠かせない一部になっているかもしれませんが。しかしそれが自らのアイデンティティになっているとしたらそれは本当に必要なものでしょうか。本来人間は神に喜んで仕える者でした。しかし神に仕えることが労働という苦役となっていくと嫌になってしまいました。ですからそこから少しでも楽をしたいと思うようになってきたのです。命を懸けて喜んで仕事をしているなら必ず祝福されるはずですが、もし仕事を給料で決めるようになっていくのならお金の支配されているのかもしれない。私たちの人生が本当は何なのか考えたいのです。

天国の銀行

21節で、あなたのたましいをこの地上ではなくて天国に貯金しなさいと言われました。あなたはどこに貯金しているのでしょうか。聖書はよいことをしてあげなさいとたとえで言われています（24-34節）。あなたが天につむのは一体何でしょうか。私たちは自分の安心のため、目的のために神を求め、蒔いているということはないでしょうか。

イエス様は自分の命ではなくあなたの命を見ていました。あなたを愛しているから、もったいない人生の中にいたあなたを変えたいと十字架に架かれたのです。本来のたましいを見つけれられると私たちは喜びへと変えられ、それが神様に繋がるならそれは永遠の命になるのです。一時の安心ではなくそれは喜びとなり存在意義となり本物となるのです。あなたが命を得て結果喜んで神の前に働くときに神は必要な糧を満たすのです。私たちが本当の目的に生きる時にそれらの必要が備えられるのです。地上での自分のたましい（プシュケー）の心配を捨てて本来の姿に変わることができれば不安定、不安全な状態があろうとも永遠のいのち（ゾエー）によって私たちは平安なのです。『何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、これらの物は、それに加えて与えられます。』12:31

私たちが神に求めなければならないものは知識、意思、感情の上をいく平安をもたらす神の良心なのです。人間が持つ良心ではなく、神が持つ良心、つまり愛です。物質的な地上の命に根拠を置いて生きるのか、それとも永遠の命に根拠を置いて生きるのか考えたいのです。

さいごに

忠実な賢い管理人の描写が出てきました。あなたの心は何を求めているのでしょうか。私たちは賢い管理人になりたいのです。もし目の前に上手いかないことがあるのだとすれば自分のためになっていないかをもう一度考える必要があります。聖書は愛の関係だと知っているながらあなたが誰かと一緒にいる理由が物質的なお金や自分の安心のためであったらその関係はすでに崩壊しているのかもしれない。本当の愛の関係とは何があっても大丈夫なのです。今、地上にあるものだけを求めていたならそんな心を癒してくださいと祈っている神様に清めてくださいと祈りたいのです。私たちの心から、裁いてしまう目線が取り去られてイエス様の創造の姿になって愛の言葉を人々に告げ知らせることができる神の手の代行者となって神がしたいと願うことをする者となりますように。どうか私たちが神様と一つになることができますように。

（要約者：西崎 真由美）

（2023年10月22日）